

Skype を活用したハワイの小学校との交流授業

A Cross-cultural Exchange with an Elementary School in Hawaii Using Skype

坂本 暁美*, 坂山 英治**

Akemi SAKAMOTO, Eiji SAKAYAMA

*四天王寺大学

Shitennoji University

**高知県四万十町立七里小学校

Nanasato Elementary School in Shimanto, Kochi

Abstract : Students at Nanasato Elementary School in Shimanto, Kochi, and students at KalihiUka Elementary School in Honolulu, Hawaii, held a cross-cultural exchange session using Skype. The Japanese students performed a play of their own creation in English and the students in Hawaii performed Hawaiian songs. They also exchanged questions regarding their own cultures. It has been shown that cross-cultural exchange sessions using information-communication technology can have a strong impact on facilitating students to actively communicate with people from a different culture.

キーワード : ICT, Skype, 異文化交流, 文化理解, コミュニケーション

1. はじめに

社会が多様化, グローバル化している現在の国際社会では, 相手の立場を尊重しつつ, 自分の考えや意見を自ら発信し, 具体的に行動することのできる態度・能力を身に付けることが必要とされている。今後ますます多様な人々との日常的な交流が拡大する中においては, 対話を通して人との関係を作り出していくような力が求められることから, 小学生のうちから異なる文化や言語をもつ人々と関わることを通して, 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することは非常に大切だと考える。

小学校においては「総合的な学習の時間」や「外国語活動」が必修化されたことで, 異なる文化や言語をもつ人々と関わる授業が数多く行われるようになった。成果をあげる授業も多くある一方で, 単に英語活動を

すればコミュニケーションができていくというような誤解があったり, 異文化の背景を持つ人との交流学习や異文化についての体験的な学習を実施することに満足して終わってしまうなどの問題点も指摘されている¹⁾。つまり現場では, コミュニケーション能力の育成にまで至らない授業が実施されているという課題がみられる。

近年, 情報通信技術 (Information and Communication Technology, 以下 ICT) の急速な進展・普及により, 映像や音声をともなったテレビ会議などのコミュニケーションツール (Skype 等) を使って遠隔地を結び, 交流授業を実施することが容易になった。坂本は, ICT を活用して遠隔地を結び, 異なる文化や言語をもつ人々と関わる交流授業を 2001 年から継続的に実施している²⁾。学習目的は音楽科の学力育成を目指したもので, その特色は異文化の背景を持つ他者に自分達が理解し

1) 文科省 (2005) 初等中等教育における国際教育推進検討会報告, p. 5

2) 2001 年 - 2011 年までの期間, 日本とハワイの小学生同士の交流を 2 事例, 日本の小学生とハワイの高校生の交流を 2 事例, 日本とハワイの高校生同士の交流を 6 事例, 日本の大学生とハワイの小学生の交流を 3 事例などの交流授業を実施した。

たことを伝える、という発信型の活動を基盤にしたものである。小学生を対象に行った先行事例には、異文化の背景を持つ者同士が相互に自国の伝統音楽を教え合ったり、テーマを決めて意見を出しあいながら共同で曲や踊りをつくるなどがある³⁾。これら先行事例の知見をもとに、高知県の七里小学校の児童が英語のコミュニケーション能力の育成と世界と繋がっている自分を感じ取らせることを目指して交流授業を実施した。

2. 交流の概要

- ①日 時：平成24年3月9日(金)
午前8時～午前8時50分(日本時間)
- ②交流学年：四万十町立七里小学校4年生(6名)、5年生(9名)
Kalihī Uka 小学校 3年生(13名)
- ③場 所：高岡郡四万十町立七里小学校教室・ハワイ州オアフ島 Kalihī Uka 小学校図書室
- ④教 科：5年生(外国語活動)、4年生(総合的な学習)

⑤交流方法

Webテレビ会議システムである Skype を使用。Skype は無料である点、音声と映像を双方向に送ることができる点、異なる OS 間でも使用できる点から今回の交流に使用した。日本およびハワイ双方ともに Skype のインストールされているパソコンをプロジェクトにつなぎ、ウェブカメラを使用して画面上には相手と自分の映像を表示させた(図1)。

⑥内 容

まず、Kalihī Uka 小学校の児童から日本語を用いた自己紹介があり、続いて七里小学校の児童が英語で自己紹介を行った。次に、Kalihī Uka 小学校の児童がハ

ワイのうたを歌った後、七里小学校の児童が地域(窪川)に伝わる「万六話」と呼ばれる大男のとんち物語のオリジナル英語劇(別紙参照)を伝えた。そして、七里小学校の校歌を披露し、フリートークを行った。七里小学校の児童からは、好きなスポーツや教科など学校生活に関わる質問が出され、ハワイの児童からも、「休み時間は何をしていますか」、「制服はありますか」など、学校生活に関わる質問が出された。食べ物に関する質問では、七里小学校の児童の「うどんが好き」という回答に対して、ハワイの児童から「うどんは私達も好き」という返答があった。最後に、Kalihī Uka 小学校の児童から「日本語を教えてほしい」という要望に対し、七里小学校の児童は「お腹が空いた」、「おはよう」などの日本語を教えた。即座に「おはよう」と Kalihī Uka 小学校の児童全員の声が出てきた時には、七里小学校の児童全員が拍手で応えていた。

3. 児童の感想

以下は、参加児童の感想を抜粋したものである。

- A児：楽しかったので、もっと英語を話せるようになってまたやりたいです。
- B児：ハワイの小学校の人たちが日本語を勉強してくれて嬉しかった。
- C児：私たちのために日本語を覚えてくれたし、ハワイの学校のことを詳しく教えてくれてハワイのことがよく分かった。
- D児：またやりたい。次はもっと英語を話せるようになりたい。
- E児：今度もやりたいけど、もっと英語を勉強してやりたい。
- F児：英語劇をして、上手と言ってくれて嬉しかった。



図1 交流授業の様子(七里小学校)

3) 坂本暁美(2002)「音楽活動を含む「総合的な学習の時間」の展開—国際理解教育と音楽教育」, 日本学校音楽教育実践学会紀要『学校音楽教育研究』Vol. 6, pp. 13-15

上記の感想と交流態度から、七里小学校の児童が、ハワイとの交流を非常に肯定的に捉えていることが読み取れる。子ども達は、七里にいても外国と簡単に交流ができることや世界と繋がっている自分を感じ取ったようだ。ハワイの児童が自分達の言語である日本語に興味を持ってくれたことを嬉しく思い、英語劇を褒めてもらえたことに喜びを感じている。この気持ちが、もっと英語を上手く話せるようになりたいという英語の学習意欲に結び付いたと考える。この意欲は、単純に英語を学びたいというレベルのものではなく、自分のことを表現できるようになりたい、相手のことを分かりたいという、人との関係を意識したレベルのものだと推測する。このように異文化の他者との ICT を活用した交流授業という形態は、人との関係を作り出していくための、積極的なコミュニケーションを図ろうとする気持ちや態度を促進させることに大きなインパクトを与える効果があると言える。

また、交流授業の企画及び実施のために中心となって奔走した同小学校校長は、学校通信『七里だより』の中で、交流授業について、次のような所感を述べている。この所感からは、小学校の教育活動における意味や教員が抱いている期待など、遠隔教育の手法を用いた交流授業に対する教師側の思いを端的に知ることができる。以下に平成 24 年 3 月 23 日発行の『七里だより第 10 号』の中のコラム「校長室より」に掲載された交流授業に関連する記述を引用する。なお、このコラムは「縁・絆」をテーマとして書かれたものである。

ハワイの学校（カリヒウカ小学校）との交流には、畿央大学（奈良県）の坂本先生に随分とお世話になりました。坂本先生との出会いは、一昨年十二月、鳴門教育大学主催の国際教育フォーラムで一緒させていただいた縁でした。

坂本先生は日本の学校とハワイの学校の間で音楽を通したテレビ電話での交流を行っていて、その実践発表をされました。その話を聞いて、七里の子どもたちにもこんな経験をさせてやりたいなと思い坂本先生にお願いをしてみたら快く学校を紹介してくれることを引き受けてくれました。それからメールを通じて坂本先生と連絡を取りながら準備を進めてきました。交流先は簡単に見つかるだろうと思っていましたが、難航してやっと決まったのが今年に入ってからでした。でもそれから日本との時差の関係でこちらの就業時間に交流することができないなど、話が思うように進みませんでした。そんな時、坂本先生は「ハワイま

で行ってくる」とカリヒウカ小学校に話をまとめに行ってくれました。嬉しいやら、申し訳ないやら、その行動力に吃驚するやら、けど感謝の気持ちで一杯になりました。お陰さまで何とか交流までたどりつけました。でも、ここに来るまでには鳴門教育大学の近森先生との縁がないとできなかったことですね。近森先生との縁で、国際交流集会もできています（以下省略）。

4. 課 題

今回の実践では、2つの課題があった。

第1の課題は、時差である。ハワイと日本は19時間の時差があるため、テレビ会議を日本側が1時限目（午前9時）に設定したとしてもハワイ側では授業終了後になり、保護者が車で送り迎えをしたりスクールバスで通う児童が多いハワイの学校では、児童が学校に残るためには保護者一人ひとりから承諾のサインをとらなくてはならないため、日本で想像するより困難だった。今回、Kalihi Uka 小学校は放課後図書室を地域に開放しているため、午後2時までしか図書室が使えなかった。そこで、七里小学校の児童の始業時間を通常より30分早くして登校させて8時に実施して対応した。

第2の課題は、相互のPC環境である。今回はPC内蔵マイク使ったことから、音声聞き取りにくい場面があった。今後は、外付けマイクや個人マイクを活用したり、スピーカーにつなげるなど、児童の小さな声も拾えるような環境設定を考えたい。

5. 今後の展望

交流授業は継続することに意味がある。今後七里小学校では、一学期に一回程度行いたいと考えている。例えば、6月に学校生活の様子（授業、特別活動、給食、行事など）を紹介したり、10月に地域の様子（文化、風土、歴史、季節など）を紹介する等を構想している。さらにこれらの活動が、低学年生を含めた学校間の交流になるような広がりを持たせる活動につなげたいと考えている。

交流授業を継続的に行う秘訣は、交流する双方にとって学習の意味を持たせることだと考える。そのためには、交流相手と共に双方の学習目的を明確にして、それを達成させるための具体的な方策を相互に練る必要があるだろう。今回七里小学校では、英語でのコミュニケーション力を促進させること、七里にいても外国と簡単に交流ができること、世界と繋がっている自分

を感じ取らせることが目的だったが、Kalihī Uka 小学校の学習目的は文化交流という漠然としたものだった。今後は、七里小学校の学習目標をさらに具体化すると同時に、交流相手側にとって交流がどういう学習になるのかを相互の話し合いを通して明確にする必要があるだろう。どちらか一方の目的を達成するための交流ではなく、相互の児童が学習目標を達成することが、交流を継続させることにつながるからだ。そのためにも、相手との綿密なやりとりを頻繁に行うことが、交

流学習を成功するカギになると確信している。

6. 終わりに

七里小学校の児童は、ハワイとの交流に好奇心に胸を踊らせて興味を持って取り組んだ。今後は児童の興味・関心を大切に、英語への興味だけでなく異文化への関心そして七里や日本を見直すきっかけとなるような活動を実施していきたい。